
幼馴染と図書室

篠宮 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染と図書室

【Zマーク】

Z4863Y

【作者名】

篠宮 楓

【あらすじ】

三つ編みおさげでガリ勉スタイルを貫く図書委員長と、臨時で来た幼馴染みな司書教諭の、のんびりなのかよくわからない、恋愛？のお話。

なんていうか、ふざけてますーとくに、蛇足部分（笑

1 図書室にて

「本ばつか読んで、目、悪くするよ」

図書室に入つて壁伝いに右手、奥。

唯でさえ来る人が少ない図書室の、これまた人気の無い貸し出し禁止本エリアの、もつと奥。

たつた一つだけある机と、椅子一脚。幾つもの本棚に隠れた、私の特等席。

今日も今日とて本の虫を自負する私は、世界から隔離されたようなその場所で、お気に入りの本のページを繰る。

昔懐かしガリ勉の、イメージを地で行く三つ編みおさげの図書委員長である私にとって、これ以上の至福の時間があるだらうか。いや、無い。

真横の窓に濃いオレンジに変わりゆく風景を従え、机に開くは古事記の分厚い本。

べらりと捲れば、ぱつと見全く意味の分からない文字の羅列。暗号のような文字達をひとつひとつと紐解いて、意味を成して行くこの興奮。

今まで、分かち合えた人はいない……。

「……」

ちよつと暗くなつたけど、いいの！ 気にしない！ いつか、きっと、会える、かもしけないかもしけな…… 無限ループ

「ねー、比奈つげばぞ。思いつきり俺を無視してゐる、気付いてるー？」

データーは国会図書館、休日は国立民族博物館、ああ城跡巡りも最高ね。

「比奈あ、お前さー」

寺社仏閣に行くときは、朱印帳はマストだからよろしく！

ほくほくと幸せ妄想に浸つていたら、見ていた本の上にそれなりに大きな音をさせて掌がどんと降りてきた。

「……」

思わず、その手を見る。

あー、骨ばった手つてある意味羨ましいよねー。

私、子供っぽいまんまだもんねえ。

「おい、比奈。いい加減こっち向け」

前の方から聞こえていた声が、いつの間にやら真横上方から降ってきた。

「手、邪魔。本が可哀想でしょ？」

顔をあげる」とさえ億劫で、本の上に置かれた手を丸めた拳でノックの様に軽く叩く。

「お前に無視されてる俺より、本の方が可哀想なのかよ

「うん」

「即答だし」

はああ、と深く息を吐き出して真横に立つテカイ団体が、肩を落とした。ような気がする。しつこいけど、私の興味は本だからー。

「比奈あ。お前、図書委員長の癖して、司書に対しての態度悪すぎー。減点したろか? 内申点」

「こたるーちゃんと違つて、数点の差に泣かないから」

冷たく返せば、余計なお世話だと小突かれた。

「まあいいや。でも、比奈……」

そこまでこたるーちゃんが言い掛けた時、

「梶原先生、よろしいですか?」

少し離れたところから甘い声がトンテキマシタ。

いや、マジで。

比喩じやなく。

まるで砂糖でコーティングされて、重みを増したかのよつたるい声。

顔を上げれば、ふんわりゆるパーーマの髪が胸元でゆれる、もう一人の司書教諭が私達を見ていた。

こたるーちゃんは本についていた手を上げて、屈めていただろう上体を戻す。

「伊藤先生、何でしうか」

一瞬にして「先生」に戻ったこたるーちゃんは、歩きながら何か思い出したよつにこちらに振り向いた。

「三嶋さん。司書としては嬉しいけど、あまり根を詰めないよつこね?」

その日は言葉とは裏腹で、わかつてんだらーなあ、と「重音声に聞こえてしまうのは仕方ないことだらう。

「分かりました、梶原先生。お気遣いありがとうございます」
丁寧な生徒モードで御礼を言えれば、満足した顔で伊藤先生と連れだつて歩いていった。

その広い背中を見送つて、私は再び本に目を落とす。
なんとなくもやもやするけれど、きっとそれは氣のせいだ！
そう断言して、再び古事記の世界へ……

「今日もやるねえ、ちーちゃんは」

「んあ！」

入れなかつた（涙

いきなり背中にどすんと重みが来て、本の上に顔面着地。

好きだけどね、本、大好きだけどね？
ファーストキスはね、せめて人がいいと思うの。

一向にどく氣配のない背中の小判ザメを、振り落とす感じで体を搖する。

「あら、冷たい。副委員長は大切にした方がいいですよー、委員長さま」

「その前に委員長の私を大切にせよ、河田佳苗副委員長」
冷たく言い放ちながら、本を撫でる。

シワになつてないかしらー

佳苗は本マニアーと、私をけなしながら机の向こう側、もう一つある椅子に腰掛けた。

「ちーちゃん、あからさま過ぎて笑えるね。梶原せんせーも、いい迷惑だらうに」

にやにやと笑いながら、ふ、と落としたトーンで言葉を続ける。

「あんながつがつ感みせられたら、引くよねー。ていうか、うちは
がドン引き。やだなー 今日の戸締まり役」

本を撫でていた私は、佳苗のその言葉ににんまりとした笑みを向けた。

「そりや、『愁傷様。どつちかが帰つていればいいね』

図書室の鍵は、司書教諭に戻すことが決まりなんだけど、実はそれ
が問題。

うちには、司書教諭が二人いる。

伊藤 千恵先生、御歳二十五歳と、梶原 小太郎先生、御歳二十一
歳。

まあ、さつきのやり取り読んでくれれば分かると思つんだけど、伊
藤先生は梶原先生LOVEでして。

また、梶原先生は臨時教諭だからその間に一、二、押せ押せ感半
端ないわけとして。

んで、司書教諭は当たり前だけど図書準備室に一人でいるわけでし
て。

鍵返しに行くと、そんな生々しいやり取りを見なきやいけないから
皆嫌がるのだ。

で、どうして私に回つてくるつて?

「本当に嫌なんだよねえ。幼馴染の”こたろうちゃん”に、比奈か
ら返してくれないかなー」
こーいうことだからですヨ。

たまたま話していたのを、佳苗に盗み聞き（いや、図書室で晩御飯

の話をした私達がバカなんだけど）されて幼馴染である事がばれたのだ。

内緒にしていたのに。

私は本のページをぺらりと捲ると、期待に満ちた佳苗を一刀両断する。

「幼馴染でも、今は単なる先生と生徒。役目は全うして貰いたい」「えー、幼馴染って事は内緒にしてあげるからさあ」

「それは当たり前。でも、嫌」

即答すれば、ケチと肩を落とされた。

1 図書紹介（後書き）

前に書いたものを、手直しして載せてみました。
お暇つぶしに……

2 蛇足・図書室にて こたるー

「本ばつか読んで、目、悪くするよ」

声を掛けても、比奈は振り向かない。

図書室に入つて壁伝いに右手、奥。

唯でさえ来る人が少ない図書室の、これまた人気の無い貸し出し禁止本エリアの、もつと奥。

たつた一つだけある机と、椅子二脚。

そこにいつも陣取るのは、俺の最愛の幼馴染。

長い髪を三つ編みにして、きつちり丈の制服スカート。

高校指定のカーデに、顔を上げれば見る事ができるだろう濃いブルーのフレームメガネ。

「冗談か？」と突つ込みを入れたくなるほど、昔前のガリ勉スタイルを貫く彼女は、図書委員長の三嶋比奈。

高校三年の彼女が十一月に入ったこの時期、受験勉強以外でここにいる事は周りから見たら奇異の範疇かもしれない。

けれど彼女は既に推薦入試を終えていて、合格しているのだ。

故に、不思議は無い。

これは比奈にも確認したし、彼女の担任にも確認済みだから間違いない。

幼馴染つて言うのを隠して聞き出すのに、すんごい苦労した。

担任がおどおどしながら言い難そうにしていたのは、きっと個人情報保護とか脳裏に浮かんだんだろうな。

俺、九月から来年三月までの契約で来た、臨時採用の司書教諭だから信用とか余り無いだろうし。

しかし比奈つてば、幼馴染だつてばらすのなんで嫌がるかな。

俺としては公言して、比奈に悪い虫がつかないようになら制したいんだけじね。

何の為に、ここに臨採に心募したと思つてんだ。まったく。

そんなことを考えながら、田の前で本を読みふける比奈を見つめる。比奈が誰にも邪魔されないようここにこの場所に来るのは、俺にとって好都合として。

教師と生徒という態度を貫く比奈に、唯一幼馴染として接する事が出来る場所なのだ。

しかし、全く振り向きもしねーな。

俺の声をあつさり無視して大好きな本に没頭している比奈の姿も可愛いけれど、そろそろ声を聞かせてもらいたいわけで。

まん前に立つて、のほほんとした声で話しかける。

「ねー、比奈つてば。思つつきり俺を無視してゐる、気付いてるー？」

「……」

返答無し。

こいつの集中力は半端無い、が、きっと今は脳内トリップ真っ最中なんだわつ。

小さく息をついて、ゆっくりと横に回りこむ。

古事記を読んでいるらしい彼女の手元には、大学ノートと筆記具。司書教諭をやつてはいるが、自分の専門は中世文学ゆえに古事記なんて全く読めない。

これ読むくじいなら、外国語の翻訳をしたほうが楽な気がする。

ああしつかし可愛いなー、三つ編みで田を伏せてるから田に頂が丸見えなのよー、比奈ひやんてば。

さすがに校舎内でどうこうすつもりはないし、それ以上に簡単に比奈に手を出すつもりもない。

気持ちはあるけどね。

え、あつてもダメ?

それは許そうよー、ねえ?

好きな子が目の前にいりやあ、触りたいし抱きしめた……あ、これ以上の想像はやめよう。

大変な事になる(涙

まあでも流石に、十八歳女子高生に二十一歳……もうすぐ二十三歳の男があつさり手を出しちゃいかんでしょう。

それにはあの顔で拒絕されたら、へこむわ。

と言つことで、今日も今日とて梶原小太郎二十一歳、最愛の幼馴染に無視され中でじやりますー。

3 帰宅、そして自宅コレクションへ

「口先か、お前の言葉は口先おんりーか！」

「煩いなあ、こたるーちゃんてば」

まったくこたるーちゃんの言つ事を聞くつもりが無かつたのはその通りなんだけど、それ以上に副委員長に嵌められたんだつてー。

鍵当番を私になすりつけようとした佳苗が、諦めてカウンターに寝つていて。

本に夢中になつて、ふと気がついたのが最終下校の鐘だった。

「びっくりー」

とか、ふざけながら本を片付けてカウンターに行つてみれば。

「鍵よろしくー」

といつ、置き手紙が。

「これ、これを体現してしまつたよ。

くわう、やられた！

上手に具合に、鍵を押し付けられた！

まだぐどぐどと、隣で文句を言つてゐたるーちゃんの言葉をスルースキル全開にして流していたら、自宅の前で立ち話をしている母親と隣のおばさんが「ひつひに気がついて声を上げた。

「あら、小太郎くん。比奈を送つてくれたの？」

「春香さん、こんばんはー。かーさん、ただいまー」

「おかえり、こた。今から春ちゃんがいじ飯にするナビ、あんた来る?」

「行かなきや、俺の飯はどーなるんだ」

「カツブな麺が、お前を待つている」

「さいでー」

呆れたよひに肩を竦めると、こたるーちゃんは自分ちに入つていつた。

また、後で。と、いい残して。

私は母親とこたるーちゃんのお母さんと挨拶しながら、その隣の家に入る。

やつ。

自宅の隣が、こたるーちゃんちで。

五歳差の私達は、なぜか幼馴染で同じ学校にいる。

手を洗つてから自分の部屋に入つて、制服から部屋着に着替えた。
コットンの半袖ロングワンピース。
下には、ショートパンツを穿く。
一応、こたるーちゃんが来るなら、普通の格好をしていなければなるまい。

ああ、面倒。

鞄の中から課題を取り出して机に置くと、階下から呼ばれたタイミングで階段を降りた。

リビングダイニングには、こたるーちゃんのお母さんである奈津さんがダイニングテーブルについていた。

「比奈ちゃん、お疲れ様。今日は餃子だつて」

箸でも叩いて喜びそうなくらい、嬉しそうな顔に思わず笑つてしま

う。

「奈津さん、ビール?」

後ろを通り過ぎながら声を掛けると、もじりと答えが返ってきた。

「奈津、あんまり飲みすぎちゃダメよ」

キッチンでは母親である春香が奈津にやつ声を掛けながら、フライパンで餃子を焼いているところだつた。

冷蔵庫からビールを一本取り出して、ついでに麦茶も手に取る。

「あら? 小太郎くんも今日飲むの?」

田代とく私の手の中のものを見た母親が、不思議そうに聞いてきた。

「……多分」

聞いてないから分からぬけど、多分、飲む日だと想ひ。

「比奈ちゃんが言つんなら、飲むかもね」

私達の会話を聞いていただりつ奈津さんが、にんまりと口端を上げた。

何か言われるんじゃないかと身構えた時、玄関が空いてこたる一ちゃんが入ってきた。

「お邪魔しますー」

間延びしたこたる一ちゃんの声に、思わずリビングの入り口に皿を向けた。

ドアを開けたこたる一ちゃんは、ジーンズにTシャツ姿。

奈津さんと私に注目されているのに気がついて、一瞬田を見開いて足を止める。

「なにー?」

怪訝そうに動き出して、いつもの自分の席に着いた。

奈津さんはそんなこたる一ちゃんに、箸を向けていたつて普通に問いかけた。

「こた。何飲む?」

珍しくそんなことを聞いてくる奈津さんに首を傾げながら、こたる一ちゃんは顔だけカウンターの上に見えている私に向かって右の人差し指を立ててにかつと笑つた。

「ビール、一本願いますー」

途端、爆笑が吹き荒れたのは言つまでもない。

「うるさいなあ、もういい加減話しを変えようよ」

ビール飲みたいだらうつて、なんとなく思つただけなのに！

当たつたからつて、こんな些細な事でもう數十分、中年夫婦だの凄い言われよう。

私は余計な事をしたという後悔を全力発動して、ご飯を口に運んでいた。

何よりも……

「やっぱり俺つてば、愛されちゃつてるよねー」

このバカこたるーが話をやめないから、全く收拾がつかないのだ。

「愛してるのは、本だけ！ こたるーちゃんで入り込んでいいのは、その知識のみ！」

そう言い返せば、

「知識が欲しけりや、俺じと貰つてー？
バカが伝染る！」

「しつかし、こたも情けないよねえ。もう五年越しの求愛行動なのに全く進展なし！」

「うねえ。ほら……、比奈つて頑固だから」

奈津さんも母親も、面白そうにこたるーちゃんを煽る。

「そういう冗談、私だいっ嫌い！」

青春真っ只中の十八歳乙女で、遊ばないで頂きたい！

最後の餃子を口に放り込むと、私は麦茶を飲み干した。

「冗談じゃないんだけどねー」

「なお悪いわ！」

カソックと鋭い音をさせてコップをテーブルに戻すと、私は勢いよく席を立つた。

「あら、もう食べ終わつたの？ 早いわねえ」
のんびりと笑う母親に、チヨップしたくなるのは私だけだろうか。
早いんじやないの、早くしたの！

ふりふり怒り狂いながら、食べ終えた食器をシンクに下げる。

「どんだけ怒つてもちやんと後片付けするあたり、真面目だよなー

「ホントいい子だわ。こた、早く比奈ちゃんゲットしなさい。母さん命令」

「命令とかいらないし。つか、頑張つてんだけどなー」

「まあ、そうしたらどちらに住むの？」

のほほんと当事者抜きで話し合いを始める三人の会話に、思わず「
再び！」と思つたけど、それは耐えた。

ばっかじやないのー？

内心叫び倒すと、阿呆すぎる会話を繰り広げる三人を無視して私は部屋へと戻つたのだ。

3 帰宅、そして血モッキンゲにて（後書き）

蛇足は夜に……

4 蛇足・帰宅、そして自宅にて・いたる一

「比奈って、ジーしてあんなに頑固のかしらー」

「あの一刀両断オーラ、ヒツわいわあ」

本当にセーですね、春香さん&かーさん。
俺もそう思います。

比奈が俺の話をまともに聞かない事は分かつていたけれど、最終下校時刻に鍵を返しに来たのにはある意味殺意を覚えた。

根つめるなつていったよな?

お前、女だからね?

最終下校時刻つて言つのは、うちの学校でいうなれば19時。

十一月の19時。ふざけんな。

まあ、俺的には助かつたんだけど。

それはおいておいて。

19時に残つているとしたら、教師が届出をしてる部活くらい。どーして俺がこんなに詳しいかと言えば、五年前にここを卒業したOBだからなんだけどね。

そーいうつてもあって、臨採の事も早めに知る事が出来たんだけど。担任とは仲良くしておるべきだと、心底思った。

あ、別にコネで入つてないからね。

ちゃんと採用試験受けて、トップだつたりじいからね?

だつてこれで、念願の「比奈の高校生活」に俺が存在できるんだぜー。いえーい

あ、ひくな、おこちよつと待て。

だつてセー、五歳離れてるセー。

制服姿は見る事はできても、同じ校舎に存在する事はできないじやん。

あ、まー。

俺の高校時代を比奈に見せたいかといわれれば、それは「めん」いつむるんだけじ。

ちやんと、担任には口止め済みほり、若氣の至りつて……いつじやんか。

ま、そんなこんなで19時に鍵を返しに来た比奈を促して、一緒に帰宅したわけですよ。

すんげー、嫌そうな顔をさらす比奈とともにね。

……くすん

んで、うちの母親。

料理が壊滅的でして。

たまにどこの頻度じゃなく、比奈の母親である春香さんにおんぶに抱っこ状態。

まあ、俺的にはありがたいけど。

比奈と一緒に飯が食べて、母親の料理から逃げられるわけで。

今日も比奈んちに「」馳走になりにいけば、キッチンカウンターの向こうに立つ比奈とダイニングテーブルのいつもの席に座る母親と田が合つた。

珍しく母親が何を飲むか聞いてきたものだから、比奈が丁度図書準備室に来た時の自分の状況を思い出してビールを頼んだ。
疲れる事があつたんだよ。……何があつたって？ そりや、おいお
いね。

するとなぜか、春香さんと母親が大爆笑。

比奈にいたつてはむすつとした顔のままダイニングに出でくると、手に持つていたビールを俺と母親の前においた。

あれ？

今、冷蔵庫開けてたつけ？

基本、俺は平日に酒を飲まない。

今日みたいに疲れてる時とかは、別だけど。

その疑問は、母親が明かしてくれた。

俺がビールを飲む事を予測して、既に用意していくれたらしい。

愛！

比奈の愛！

なのに、なんでお前はそんなに不機嫌かね。

食事が始まつた後も、不機嫌な比奈は相変わらずで。さつさと食べ終えると、二階の自分の部屋へと上がりつてしまつた。

それを見送つて、三人で溜息をつく。

そして冒頭に戻るわけですよ。

「やつぱり比奈ちゃん、こたのこと嫌いなのかしらねえ」

「うわ、かーさんてば。不吉な事言わないでくれよ」

箸でつまんだ餃子を口に放り込みながら眉根を寄せると、階段の方を見ていた母親が俺の顔を見て溜息をついた。

「外見は良くなんでやつたのに、中身がこれじゃね……」

「おいなんだ、その失礼な言葉は……」

「あんまり構いすぎるのも、比奈の性格的に引いちゃうのかしら」

「じゃあ、構うなよ！ 構つてるのは、おたくら一人だ！」

「でも五年も言われてれば、情も湧くと思つたんだけど。あてがはずれたわー」

「小太郎くん、比奈溺愛しそうで、ちょっとひざこから……」

……溺愛すぎて、ウザイ……

ピキリ、と身体が固まった。

溺愛しそうでウザイ……、しかも比奈の母親である春香さんに言われるとか、どーなの俺。

「……かーさんたちは、俺とは反対だと？」

恐る恐る聞いてみれば、にこりとわらう春香さん。

「私は小太郎くん、好きよー？ ウザイだけで」

「こたに比奈ちゃんはもつたいないけど、うちの娘にしたいから妥

協

……俺の存在価値つて…！（涙

5 自室にて

部屋に戻った私は、机の上に出しておいた課題をひらりと見てすぐ
に目を逸らした。

眼鏡を片手で外して机に放り投げると、そのままベッドに倒れこむ。
ばふつといい音をさせた後、ほこりが舞うのが見えたのはこの際忘
れよう。

仰向けに身体を反転させて両手を天井に向けて伸ばすと、力を抜いて
顔を手の甲で覆つた。

真っ暗になる視界に、伊藤先生……佳苗曰く、ちーちゃんの鋭い視
線が思い浮かんだ。

鍵当番を押し付けて帰りやがつた佳苗に文句をぶつぶつ言いながら、
諦めて戸締りを終えた後。

図書室の横にある準備室のドアを、ノックした。

一拍置いた後、こたるーちゃんの声がして。

その”間”に嫌な感じを抱きつつ、失礼しますと声を掛けてドアを開けた。

「あら、委員長？」

いかにも驚いた、みたいな態度で小首を傾げる伊藤先生。
うん、疑問に思うところはきっとそこじやない。

あなたの、立ち位置だから！ 残念つ（何気に懐かしい）

向かいになつているはずの席。

なぜかこたるーちゃんの真横に立つて、机に手を置いた状態でした。

まあ、高校生身長でも手を机に置けばちよつと上体を屈めるよね？

伊藤先生は、百六十センチくらいあります。

顔がね、胸元に来てるんですよ。

いたる一ちゃんがまつすぐ見れば、ほよよんなものが田の前にいたあ、アタサ開ける前は呪いは一カジ、一たる一ちゃんは呪い

よつに自分の机から少し離れている。

だつてさ。

こたるーちゃんが安堵するつて事は、伊藤先生にとつては邪魔だつたつてことでしょ？

意識していく。一方で、人に皿を向かないよう指示し、伊藤先生に鍵を差し出した。

「本を読んでたら、いつの間にかこんな時間になつてまして。今日の当番が気を遣つてくれたようで、鍵を置いていつてくれたんですね。あんたのせいだよ、伊藤先生。」

脳内副音声は、絶対聞かせられん。

「――笑いながらそう言えば、伊藤先生は私に向かって手を伸ば

した。

「三嶋さん。委員長なのに、皆に迷惑掛けちゃダメよ？」
かけてるのは、あんただからーーーつ！ 残念！ b y

伊藤先生が鍵を受け取るのを見ながら、脳内のみでの雄叫び！

これ以上、無理。

これ以上、ダメ。
我慢できないわー。

とつあえず、自分の役目は終わったのよしこよひー。
もつ帰るー。

「ああ、三嶋さん。ちょっと待つてくれる?」

「あー

こたるーちゃんの声に、マジで体がびくついた。

何を言つつもり?

あんた、何を言つつもり?!

戦々恐々とした内心の怯えを確實に察知しているだろ? こたるーちゃんは、机の横に掛けっていた鞄と椅子の背に掛けられた上着を手に取ると、伊藤先生を避けるように大回りをして私の前に立った。
「一度職員室に用事があるから、途中まで一緒に行こう。もう、校舎内も暗いしね」

と、これはもう満面の笑みで言いやがりまして。

「あ、え、い、う、え……」

「どんな発声練習」

驚きと突き刺さるような伊藤先生の視線の恐ろしさに呻いた私に、くすりと笑いながらもその目が笑ってねえつー

見捨てるんじゃねーオーラ、出まぐりー

こたるーちゃんは私の横から手を伸ばすと、半分しか開けていなかつた準備室のドアを全開にした。

そして私の肩を軽く押して、廊下へと促す。

「梶原先生、鞄まで持つていかなくてもよろしいんじゃありません

?」

思いつきり置いてけぼり状態の伊藤先生が、寂しそうな声音でこたるーちゃんを引き止める。

顔を準備室の中に向ければ、鋭い視線を向けてくる伊藤先生の姿。

……恐怖！

思わず固まつた私の視界に、その視線を遮るよつこでかい背中が現れた。

「私、臨時教師なのでもつ帰らなければならんんですよ。残業は許可されてないんです」

顔だけ後ろに向けたこたろーちゃんは、いたつて柔らかく伊藤先生にそう告げると、彼女から見えないよつに私の腕を掴んで廊下へと押し出した。

「そうですか」

落胆したような声がしたけれど、私から準備室内はもう見えなくて。

「お先に失礼します」

こたろーちゃんの挨拶とともにドアが閉められて、伊藤先生の声は聞こえなくなつた。

ベッドに仰向けに寝転んだまま放課後の状況を思い返して、ひとつ疲れが全身を襲つた。

明日は、自分の鍵当番。

こたろーちゃんがいてくれればいいけど、伊藤先生だけだったら厳しいなあ。

伊藤先生にとつて、ガリ勉タイプの私はお好きになれないらしくて。当たりが厳しいのだ。

もともとそのなのに、先生と言つ態度で接している時もこたろーちゃんは何かと私のそばに寄つて来る。

それは私が図書委員長だからっていつ理由が、大きいのだけれど。
面倒だなあ、と溜息をついた時。

「比奈、ちょっとといいか？」

ノックとともに、いたる一ちゃんの声が聞こえてきた。

6 蛇足・自室にて・いたる

夕飯を食い終えた俺は、まだ少し残るビールを煽りながら、ぼーつと放課後の事を思い返していた。

「梶原先生、これ、分かります?」

比奈との逢瀬を邪魔された俺は、その張本人である伊藤先生に迫られていた。

……なぜに、コノヒト。

相手が比奈だつたら、喜びに踊り狂うのに。

まあ、いいや。

伊藤先生は向かいのデスクを使用しているわけで、そこから手を伸ばして俺の机の上に書類を一枚置いて指で指し示す。それは貸出禁止エリアの説明書で。

分類ごとになつてはいるんだけど、その場所を移動させる指示が来ていた。

内訳だけだから、場所はそのままだけど。

場所変わつたら、比奈、怒り狂うんだろうなつて思いつつ顔を上げたら。

おー

思わず、拍手をしたくなつた。

ぼよーんとしたものが、目線上にあります！
すっげーな、これ、人に見せて恥ずかしくねーのか？

おかしいな、伊藤先生ってこんなに積極的な人だつたっけね？
九月に採用されてから今月で四ヶ月。

最初は普通だつたんだけど。

いつの間にか、一人でいればこんな事が多くなつてきたわけですよ。
まあ、別に乳見せられて興奮するほど食てるつもりないし、むし
ろそーいつた飢餓感は全て比奈に対してしか向いてない。

ただなんてーの。

物珍しいものを見てしまつ、あんな感じ。

そーだなー、久しぶりに見たカマキリとか、そんな感じ？
あ、そんなこと言つたら怒られそう。カマキリに。

「梶原先生？」

思わずぼーっと考えてしまつて、掛けられた声に意識が戻つた。

「あ、すみません。えーと……」

そう言いながら書類に目を落とせば、一ひとつと足音がしてそれが
真横に立つ。

ドアから俺を隠すような、そんな立ち方。

近いんだから、反対側回り込めば良いのに。

そんなことを考えていたら、伊藤先生の手が俺の机に置かれた。

「ふふ、梶原先生でも考え方する時なんてあるんですね？」

伊藤先生はくすりと笑うと、口端を微かに上げて目元を緩める。
少し上体を屈ませるから、再びぼよーんが目線に来てますよ。
俺はそんな事に気がつかない振りをして、顔を上げた。

「一応、人間ですかね。考え方くらいはしますよ、普通に
ふふ、と笑い返せば、同じ様に笑みを浮かべる伊藤先生。

「何の悩み事ですか？」

「え？」

いきなり踏み込んだ質問をされて、問いかけのよつた声を上げる。

「相談、りますよ？」

……比奈の事相談してもいいならな！

といつ、脳内雄たけびは置いておいて。

面倒くせえな、とりあえず断るよ俺。おーけー？

「あー、申し訳ないんですが……」

そこまで言つた時だつた。

準備室のドアから、控えめなノックが聞えたのは。

助かつたーつ！

今日の鍵当番、ナイスタイミングッ！！

断るのは簡単だけど、根にもたれるのは面倒だからね！

「はー、どうぞ」

そういうながら、背を仰け反らせる。

はつきり言つてこの立ち位置、勘ぐられても仕方ない感じだからね。

俺が声を掛けると「失礼します」といつ、控えめな声。

……つてか、この声……

伊藤先生の横から顔を出してみれば……

「あら、委員長？」

比奈がいたあああつ！

やつべー、マジ危ねーつ！

仰け反つておいで、よかつた！

物珍しさから、凝視してなくてよかつた！

俺の首繫がつた！！

その後、なんとな〜く俺を引き止める伊藤先生を言いくるめて比奈と帰ってきたわけです。

疲れるだろ？

疲れるとおもわねえ？

こんなん、ビールとか飲まないとやつてられねーでしょ。

だつてーのにや。

母親達に遊ばれるとか。

俺、前世で何かしたんですかね。

女弄ぶのこととか。

本気で好きな女にだけ！ 振り向かれないとか！ どんな拷問！？

「こたは、押しが強いんだけど肝心なところは弱いんだよね。総合的に、中途半端なへタレつてーの？」

「あら、中途半端なんてそんな。正真正銘、へタレつて言つて上げた方がいいんじゃないから」

どつちもどつちだよ！

比奈が一階に上がつてから延々と続いている母親と春香さんの俺への批評を聞き流しながら、最後に残つたビールを口の中に流し込んだ。

炭酸の消えかかった苦い液体を胃に送り込んで、よこしょ、と椅子から立ち上がる。

「あら？ 帰るの？ 小太郎くん

それに気付いた春香さんが、カーサンとの話を止めて顔を向けてきた。
ビールの缶を濯いでそれをゴミ箱に放ると、肩をすくめて溜息をつく。

「流石に今日は比奈、降りてくれないでしょーから。帰りますよ」

これ以上、あんたがた二人の話を聞かないようにもね！
少し残念そうな表情なのは、弄れる人間がいなくなるからでしょーが。

そのままダイニングのドアまで足を動かせば、少し真剣な声の春香さんに呼び止められる。

「なんですか？」

振り向けば、笑みを消した春香さんがじっと俺を見ついて。俺の声に、その口を開いた。

「高校卒業が、キーポイントだからね？」

「春香さん……」

「高校卒業、だからね？」

念を押すように言葉を重ねる春香さん、「、深く頷く。

「分かってますよ」

今までに、何度も言われた言葉。

”高校卒業”それが、キーポイント

卒業するまで、手を出すなってことなんだろう。

俺を煽つっていても、春香さんは比奈の母親。

自分の娘が可愛くて、大切にしたいのは当たり前だから。

「こた、頑張つてー。カーサンのために」

眞面目な雰囲気に水を差す自分の母親に苦笑しつつ、廊下に足を踏み出してからもう一度振り返った。

「比奈の部屋、行つてもいいですか？」

やつぱり、ちょっと話したいかも。

今日、まともにしゃべっていないし。

春香さんはいつも笑つて、ひらひらと手を振り。

「下に私達がいること、重々肝に銘じて行動しろよ？」

なぜか、ドスを聞かせたかーさんが俺を睨んでいた。

……役割、反対だろ？……。

7 寝たふり比奈

ぎくり、と肩が跳ねる。

思わずドアを凝視すれば、再び鳴るノック。

「比奈？ お前、寝てるのかー？」

怪訝そうな声が、それに続いて。ドアノブが押し下げられるのが、ゆきくじと感じられた。

「……比奈？」

視界は、真っ暗。

つい、目を瞑ってしまった。

「寝てんのー？」

寝てます！

返事できないうけど、絶賛睡眠中です！

ポーカーフェイスは大得意。

とにかく今は、寝たふりで切り抜けましょー

真つ暗な視界に何も見えないけれど、雰囲気で分かるのは。

……じたるーちゃんが、部屋の中に侵入（ー）してきやがったああ
つ！

うつわ、目、開けてたら殴りたい！
叫びたい！

蹴り飛ばしたい！

何、寝てたら勝手に入つていいと思つてゐるのか、この変態同書めー！

脳内で悪口雑言呟き倒していたら、ぎこちり、とベッドの端が重みで音を上げた。

そっち側に、身体が少し傾ぐ。

……、何この状況。

雰囲氣的に……、あくまで雰囲氣的に私の横に座つてしませんかね！？
しかも、じつち見てるよな！？

やばい、ちよつと緊張してきた。
寝たふりばれたら、ウザそり……。

「……比奈」

思わず、鼓動が跳ねた。

……いや、跳ねたらやばいけど。
こたるーちゃんの、そんな声、初めて聞いた。
なに、この伊藤先生みたいな声。
あつ、甘つ！

「比奈」

再び呼ばれる自分の名前に、ぱくぱくと鼓動が早まる。
やばい、顔だけは……顔面真つ赤になるのだけはなんとか阻止せね
ば……！

そつと、私の前髪を指先で梳いていく感触にびくっと表情筋を動か

してしまった。

こたろうーちゃんは一瞬指先を離したけれど、私の様子が変わらない事に安堵したのか、再び指先を髪に通していく。

気持ち、いいかも。

頃、まだ小学生だった頃。

こたろうーちゃんもまだ小学生で。

お父さんが単身赴任で奈津さんも働いていたから、よくこたろうーちゃんはうちに預けられていた。

私は小学校一年生で。

こたろうーちゃんは、六年生。

よく、本を読む人だつた。あ、今も変わつてないけど。

でも私はまだ駆けずり回つて遊びたい年頃で、こたろうーちゃんに付きまとつてたつけ。

今にして思えば、随分我儘な幼馴染。

けれどこたろうーちゃんは諦めていたのかあきれていたのか、私に付き合つて遊んでくれた。

そのうち私が疲れて寝てしまつと、よくじつやつて髪を手で梳いていてくれていたのだ。

安心できて、落ち着けて。

そのまま眠りに落ちてしまつ事が、多々あった。

本当に、いい思い出。

今、こたろうーちゃんに対して、そんな気持ちは全く無い。

安心なんて、まったく出来ない。

……でも

その盐は、変わらず気持ちいい

7 寝たふり比奈（後書き）

蛇足、明日投稿になるかもですへへ；

一階に上がってきた俺は、田端のドアをノックした。

「比奈、ちよつといいか?」

そつ声を掛けても、返事は無い。
はて、また無視か?

それか、本に熱中して居るのか。

「比奈? お前、寝てるのかー?」

再び掛けた声にも反応は無く、考えた末(一瞬)ドアをあけてみた。
ひつひつひつひつ、それ一いつそり。

「……比奈?」

開けたドアの向ひには、ベッドに仰向けて寝転がる比奈の姿。

「寝てんのー?」

声を掛けても、反応はない。
ただ、ちょっと分かるのは。
こいつ、寝た振りしてやがるな?

八畳と大きな田の部屋を持つ比奈は、一方の壁を本棚で埋め尽くし、腰高窓の下にベッドを置いて居る。

ドアから覗き込めば背の高い俺にとつてベッドに横になる比奈の顔を見るくらい、造作の無い事なのだ。

眉間に皺、寄つてますよ。比奈さん。

あなたの嘘をつく時の、癖ですね。

十八年越しの幼馴染を、馬鹿にしちゃこけません。

悉く俺を無視する比奈をからかいたくなつて、その部屋に足を踏み入れた。

比奈の部屋に入るのは、久しぶり。

しかも相手がベッドに寝てるとか、ちょっと俺的おこしきねえ？

つーか、持つか俺の微小な理性！

ゆつくりと足音を余させない様にして、ベッドの脇に立つ。

眉間に皺、増えてますぜー。

あまりに可愛らしげに反応に、嗜虐心がつい頭をもたげる。

これは拗ねて口もききたくないとか、そんな感じですかネ。

ああ、なんで一々俺のツボることばっかすんのよ、比奈ちやんてば。だから手放せないのー。

ゆつくりとベッドの端に腰を掛けば、ぎしづと意味深な音が部屋に響く。

それでも比奈は、懸命に目を瞑つてる。

うん、頑張れ。

その分、俺は楽しい。

きつと寝た振りしながら変態司書ーーとか変態じたるーとか言つてるだらーけど、一向に構わん。

むしろ、OK！ その通り

比奈の眼鏡を外した素顔は、はつきり言つてめちゃ可愛い。

フィルター掛かってるって言われるかもしれないけど、マジで可愛い

い。

眼鏡も好きだけど、素顔の方が好き。

でも、学校ではそのままよし！

俺以外に、あえて見せなくていいから！
ああ可愛いなあ、ちくしょー。

「……比奈」

ちょっと俺的、頑張つてみることにしました。
甘く、囁くように名前を呼ぶ。
普段はこんなスキル、発動しないんだけど。
冗談でかわされている俺としては、そうじやないってことを知らし
めたくて。

「比奈」

ハチミツでも添加されてんじゃないかってほど、甘く囁く。
つてーか、甘い。

比奈は、名前さえも俺に甘さを覚えさせる。

微かに頬が赤いのは、ちゃんと俺の気持がいいと伝わると思つて
いいんだろうか。

つーか、ただ単に照れてるだけか。

目を細めて比奈の寝（つて本人は主張している）顔を見つめながら、
ゆっくりと指を伸ばして額に掛かる前髪を梳いた。
さらりと指先から伝わる感触に、感情を突き抜ける強烈な焦燥感。

何で伝わんねーのかな、何で比奈は俺を避けるんだろう。

小さい頃は、"こたるーちゃん、大好きー"って言つて、俺の後をずっとついて回つてたのに。

それこそ本好きになつたのは、同じく本好きな俺の影響かと思つたのに。

ただ単に好きなだけで、俺の影響なんて数ミリもないつてこと、本人に断言されたしな。

現に、中世文学が好きな俺に対し、古典文学が好きな比奈。好きなものは一緒でも、興味の範囲が違うらしい。

なんだよなー、大人の階段上つてる最中に俺は振るい落とされたつてこと?

そんな階段、比奈に必要ねえ。むしろ、俺が壊す。

無言のまま髪を梳く。

途中比奈の頬がぴくりと動いて少し驚いたけれど、目を開けないからそのまま指先で彼女の髪を遊ぶ。

次、いつ触れられるかわからねーし。

しばらく梳いていたら、こてりと比奈の顔が横を向いた。

「ん?」

微かに、寝息が聞こえる。

手を戻して顔を覗き込めば、寝入つている比奈の姿。

その眉間に、皺はない。

「寝やがつた」

マジか。

この状況で。

つても、最近怒鳴られてばっかだからな。

昔みたいに安心を『えられたらいいとは思ひなび、それだけじゃ比奈を自分のものにできない。

男として、意識してもらわねーと。

指尖を伸ばして、比奈の脣を親指でなぞる。

ふにふにと柔らかい感触に少しもつたらない気がしたけれど、息を吐き出してベッドから立ち上がった。

足元にたたまれていたタオルケットを広げて、比奈に掛ける。そのまま電気を消して、ドアを閉めた。

階下からは、母親一人の楽しそうな会話が聞えてきて。閉めたドアをに、ゆっくりと掌を置く。

比奈、猶予は高校卒業するまでだからな。
卒業したら、覚悟しておけ？

8 鮎足・寝たふり比奈・こたるー（後書き）

1～7に（改）がついていますが、変更点は話数表示を加えただけです。

本文は変更していませんので、よろしくお願いします。

9 カウンターと後輩

目が覚めたら、朝でした。
つて、私！ 駄目じやんつ！

「頭痛い……」

がんがんと痛みを訴える頭を片手で押さえながら、私は憩いの図書室のドアを開けた。

今日は当番だから、いつもの安息の地に赴くことはできない。
けれどカウンターにいても本は読めるから、まあいいとする。

「お疲れ様です、委員長」

カウンターに歩み寄れば、可愛らしい男の子。
顔の作りがじやなくて、もうなんていうか仕草が！
しつぽふつて」飯待つてる小型犬つて感じで。
お手！……は、違うか！

「お疲れ様、松井くん」

なんとか口端を上げて笑みを作ると、彼の後ろを回つて空いていた席に腰掛けた。

松井くんは、一年生の男の子。

特に何の理由もなく委員会を選ぶ人が多い中で、彼は本好きが高じて図書委員になつたある意味同士！

友人知人には、読書をおっさん趣味と一刀両断されているもので。
なにやら、嬉しい。

彼と一緒にカウンター当番は、本当に楽。

氣を使って何か話さなければならないわけじゃないし、お互い本を

読んで時間を過ごすだけ。

最高です！ 素敵です！

お手！ どうしてもやりたい（笑

さて、今日は久しぶりに源氏物語持ってきたんだよね。
たまに読破したくなる。

自宅から持ってきた源氏物語を開くと、いつもなら幸せな細かい文字の羅列にすきりと頭が痛んでこめかみを指先で押した。
昨日寝たふりして切り抜けようとしたら、すっかり眠りに入っちゃつたんだよね。

久しぶりに髪を梳かれたその感覚が、とても気持ちよくて。
目、覚めたら昨日のまんまの体勢でワタクシ流石に焦りましたよ。
思わず着衣の乱れを確認した私、間違つてないと思つ。

ぐりぐりとこめかみを押してたら、心配そうな松井くんの声に顔を上げた。

「頭、痛いんですか？」

読んでいたのだろう本を机に伏せて身体ごと私の方に向けている彼は、とても心配そうな顔。
思わず、胸にキュンとくる。

かーわーいーーー

決して現実には口にしない言葉を脳内雄叫び発動して、内心悶える。
何、この如何にも心配です、どうしたんですかご主人様！ 的な雰囲気！！ 的な態度！

比奈の読書の範囲は、ラノベから乙女小説からはては古典文学・俳諧等々雑食多岐に渡る。

故に、萌えにものつていけるのだ！

書き手の雄叫び

けれど……と、私は内心自嘲する。

心配してもらつような理由で頭痛がするわけじゃないのが、何やら申し訳ない。

私はこめかみに当てていた指を外すと、極力笑みに見えるように口端を上げた。

「大丈夫よ、少し寝不足なだけだから」

嘘だけど！

まだこっちの方がいい！

寝すぎて頭痛いより、寝不足の方がなんとなく図書委員長的には正解のはず！

よく分からぬ事を納得しながら松井くんを見ると、がたりと椅子から立ち上がった。

「寝不足は辛いですよ！ 僕がカウンターにいますから、いつもの場所で寝てきてください！」

おっと、声が大きいよ松井くん！

いやまあ、確かにいつもの場所なら寝てもばれないけど……。

脳裏に浮かぶのは、昨日の伊藤先生の言葉。

”委員長なのに、皆に迷惑掛けちゃダメよ？”

どくり、と不快な鼓動が身体を震わせる。

嫌味のよつな、けれど正論であるその言葉に反論する余地はなかつた。

確かに伊藤先生の態度が最近顕著すぎて生徒達が引いているのは確かだけれど、私があの時間まで読書にふけつていなければ避けられた事態だった。

少なくとも図書室を閉めるべきその時間に、私の読書の邪魔をしないでくれたのは下心もあるだらうけれど佳苗の優しさもほんの少し入っているはず。

自分のダメさ加減に落ち込みながらも、松井くんに気付かれないと両手を振つて彼の言葉に遠慮を示した。

「大丈夫よ、松井くん。心配してくれてありがとうございます」
そう言ってこの話はおしまいとばかりに、視線を手元に落とそうとした時だった。

「委員長、体調悪いの？」

声を掛けられて、顔を上げる。

カウンターの前には伊藤先生と、その彼女に腕を掴まれているころーちゃんの姿があつた。

春香さんの話だと、比奈はあのまま朝まで目が覚めなかつたようだ。
寝る子は育つ（笑）

翌朝出勤のために玄関から外に出ると、丁度回覧板を手に歩いてきた春香さんとかちあつた。

「春香さん、おはよー『ございまー』」

「あら、おはよう。小太郎くん」

声を掛ければ、ほんわりとした笑みが帰つてくる。

春香さんの手から回覧板を受け取つてそれを玄関の中に放り込むと、まだそこにいた彼女と目があつた。

「春香さん、どうかしたのー？」

帰る気配の無い春香さんに首を傾げて問いかければ、春香さんは小さく頭を振つてにこりと笑つた。

「比奈、あの後ずっと寝てたのよ。起きたら朝で、本人びっくりしてたわ」

「うーーー。そりや、俺もびっくりですねー」

あのままつて、十時間近く寝てたつて事?・?

「でもまあ、寝すぎて頭痛そうんですけど」

苦笑気味に続ければ、本当にね、と溜息をつかれる。

そして何やら意味深な視線を俺に向けて、春香さんは家へと戻つていった。

……あれ? なんか、誤解されてる?

ふと思つたけれど、内心、すぐに否定した。

ないない。俺のへたれさだけであんだけ盛り上がりがれるんだからなー。

そう思いなおして、俺は比奈の待つ（別に本人は待っていない）学校へと出勤したのだ。

「さてと」

ぽつりと、呟く。

俺が今いるのは、比奈の大好き憩いの場所近くの貸し出し禁止本口一ナ一。

うちの学校は一応、名の知れた進学校。

普通科と情報処理科の一いつで構成されていた。It-s過去形。

俺がいた頃は、だ。

今年、比奈が三年に上がった際に、新たな科が新設されたのだ。文系進学科と理系進学科。

その道の有名大学を目標とした生徒を育成するのが目的で、それに伴つて校内で変更される部分が多く出来た。

俺が司書教諭として、臨時に雇われたのもその一つ。

今までそれなりの蔵書のみを扱っていたけれど、専門的なものを増やす事が生徒や教師から求められたのだ。

司書にも色々仕事があるけれど、今回の俺の仕事は教師と話し合って購入する蔵書を決め、そして整理し目録として概要をデータ化するというのが大きな点。

理系と文系、各々の教師から今日の午後に上がってきた購入希望の目録を手に、それまでスペースのあまりなかつた貸し出し禁止本エリアの配置をどう変えるか思案していた。

いるんだよ。たまに、貸し出し禁止だつて言うのに鞄に入れて持つ

て帰る奴。

あと、最悪なのが必要な部分を切り取る奴とかね。

図書館と違つて学校の図書室だから、セキュリティー用の管理タグとかつけないしな。

必然的に、このエリアを閉鎖して申請入場制にするか、カウンターから見やすい位置に場所 자체を変えてしまうか。

本来なら全書にそういうことをしたいけれど、学校図書室という人員とスペースの問題上、出来る範囲は決まってしまう。ならば希少本や高価格の本の多い貸し出し禁止本が、優先となるのは仕方ない。

ふむ、と顎に指先で触れて考えていた俺は、そういえば今日のカウンター業務が比奈の担当だつた事に気がついた。

この学校の誰よりもこの場所を知つているだろう比奈なら、多分ここを使う大体の人数も人気のある蔵書も把握しているだろう。比奈が大好き憩いの場所はこの奥だけれど、そこからこの場所はよく見えるのだから。

伊達に、あの場所にずっと陣取つてゐるわけじゃないだろう……と思う。

……いや、集中しすぎでみてない可能性も……？

そう考えた俺は、迷うことなくその足をカウンターへと向けた。

生徒な比奈に、話しかけるチャーンス！

情報は得られないかもしれないけど、少ないチャンスも見逃さないぜ！

普段だつて話しかけたいのに、思いつきり比奈が拒否するんだよな

ー。顔で。

くんじやねえ、よるんじやねえ、話すんじやねえ。

そう聞えてくるのに話しかけに行く俺つて、M?

ま、比奈相手ならでもMでもいいけどね。

つーか、どうちも希望？

苛めたいしー、冷たくされても結構平気。

比奈の本音は、分かつてゐつもりだもんね。

本気の拒絕なら、あいつは口も聞かない。

アホな思考を廻らせながらカウンターの見える場所までやつてきて、足を止めた。

そこには、じめかみを指で押す比奈の姿。

寝不足で、と隣に座る一年坊主に話しかけているのが聞える。

……寝不足じやなくて、寝すぎだろ。

つい笑いそうになつた俺は、子犬よろしく比奈を心配そつと見つめる一年坊主に目が止まった。

……お前、よもやまさか……

比奈を見る目は、純粋に心配しているように見える、が、いやしかし……

なんか、イラッとする目してやがんなオイ。

しかも比奈の目が”いやーんっ、かーわーいーーー”とか言つてそうでむかつく。

何、年下の魅力にやられてやがる。

お前な、可愛くとも年下でも男は男！

その顔の下で、何考えてんのかわからんねーんだからな！

俺みたいに！ 比奈にはバレバレ！！ 書き手雄叫び！！

俺は一瞬にして冷静な思考を、貼り付ける。

カウンターに近寄りながら、にやりと口端を上げた。

年下の魅力よりも、大人の魅力だろう。

若干狩猟者にでもなつた氣分でカウンターに向かうと、小さな悲鳴とともに後ろからするりと腕を掴まれて前に引っ張られた。驚いて目を向ければ、腕を掴む乳……じゃなかつた伊藤先生の姿。うるるん、という上目遣いに思わず呆気にとられる。

「『めんなさい、躊躇っちゃって……！』

「……イエ」

ぐああああつ！ 一いつちの大人の魅力きやがつたああああつ！！

10 蛇足・カウンターと後輩・こたるー（後書き）

今日、新しいPCが届く予定でして、設定等に勤しむ予定です。
一応明日更新は出来ると思うのですが、日中掛かり切りになれない
ので、

間に合わなかつたらすみません。
月曜日は必ず更新します。

篠原

「で、どういった本ですか？」

隣に立つこたろうーちゃんを見上げれば、優しげな視線とかち合つ。それは親しみを込めつつも他人を感じるもので、思わず渡された用紙をひつたくるようにその手から受け取つた。

「三嶋さん？」

先生モードのこたろうーちゃんの声は、心臓に悪い。知らない人みたいで、なんだか嫌。けれどもっと嫌なのは。

「委員長、わかる？ 大丈夫？」

親切な振りして心配しつつ、私達の事監視している伊藤先生！ あなたですからーっ！！ 残念つ 何気に好き

先ほどカウンターの前で腕を組むように立つ二人を思わず呆気にとられて見ていた私は、おずおずとでもいづように掛けられた声に意識を戻した。

「梶原先生、伊藤先生。何か御用でしょうか」

それは少し怯えたような、松井くんの問いかけ。

意識せず松井くんを見遣れば、問い合わせたもののその表情はびくびくしていく。

まるで、尻尾を足の間にしまつた小型犬！！ 決して大型でも中型でもない！ チワワ！

萌えるーーっ！ かわいい！！ もう、一つとして不可な場所無し

！――！

なんて萌えに悶えていた私は、何やら不機嫌そうな視線に目を向けた。

……こたるーちゃん、松井くん睨んでどーしたのさ……

不機嫌な視線の元は、こたるーちゃんだった。

松井くんを表面上にこやかに見ているけれど、目が全く笑ってない。可愛い可愛い松井くんは意味は分からずとも本能的に恐れを感じるようで、ちらちらと視線を彷徨わせながらこたるーちゃんを伺っているようだった。

あー、なんでこたるーちゃんは、可愛いわんこを苛めるかな。

あえて言うなら私も物凄く失礼な思考をしているんだけど、それは棚に上げる！ めっちゃ高いとこにネ！

小さく聞えないように息を吐き出すと、伊藤先生とこたるーちゃんに目を向けた。

「あの、何か御用でしちゃうか

冷静な私の声に、こたるーちゃんが顔を向けてきた。

あれ？ 私に対しても、何か怒つていらっしゃる？

少しだけ和らいだ気がするけど、不穏な空気は全くなくなつていな

い。首を傾げると、もう一人事情を知つていそうな伊藤先生に目を向けた。

「あの、何か……」

「私は特に用はないわ

左様ですか。

んじや、カウンター前に来るなよ。

イラッときたけれど顔には出さず、松井くんに田配せる。
用がないなら、座つていいよね。

大体、ここで皆が立つていたら借りに来る人に、邪魔だし。

軽く会釈して座りうとした私に、やつとこたるーちゃんが声を掛け
てきた。

「三嶋さんに用があるんだけれど。松井くん、彼女借りていっても
いいかな？ カウンター、頼める？」

「は？」

「はいっ！」

怪訝そうに聞き返した私と、座りうとしていた体を再びピンチと伸
ばして返事をする松井くん。

こたるーちゃんは穏やかな笑みを浮かべて、私を見ている。

「私、ですか？」

なんの用だよ、学校でー。

思わず胡乱気な視線を向ければ、口端を上げたまま手に持っていた
紙を軽く顔の前で振った。

「貸し出し禁止本エリアについて、聞きたい事があるんだ。読書の
邪魔をしてしまって、申し訳ないんだけど」

本当に、申し訳ないと思つてらつしゃいますか。

「あら、それなら私がお手伝いしますよ。委員長は、読書大好きで
可哀想ですし」

伊藤先生、本当にそう思つてらつしゃいますか？

顔、笑つてますけど。

まあ、でもこれで私がこたるーちゃんと一緒に行くことはなくなつ
たと。

本読もつ

そう結論付けて、椅子に座りうとした時だった。

「伊藤先生。お気持ちは嬉しいんですが、私は三嶋さんの意見を聞きたいたいんですよ」

「は？」

「なんで！？」

おもいつつきこたるーちゃんを見た私は、イラついた視線とかち合つて座り直としていた体を再び戻す。

まあ、こたるーちゃんだけ一応先生だし。ここであまり反抗しても、仕方ない。

つーか、怖いよ！ 頭！ 主に田…！

「分かりました」

そう云えれば、満足そうに頷くこたるーちゃん。

この方は優しそうに見せかけて、血几中&思い込みの激しい御仁であつた。

怒りせると、面倒くわこ。ひつじょーーー、面倒くわこ。

松井くんにお願いねとこつ意味で軽く手を上げれば、彼はしつかりと頷いてくれました。

……お留守番わんこ…！

チワワじゃないなら、豆柴でもOK…！

くうつ、と拳を握り締めつこたるーちゃんの前に立つ。

「三嶋さん、こめんね？」

思つてないだろー。

「イイド」

これも、図書委員長のお仕事ですから。

そつ言外に含めれば、少しだけ苦笑するこたるーちゃん。

こんなアイコンタクトとかとつてると、伊藤先生に文句言われ……

目線をそのまま下ろせば、がつこつこつこつを見つめる伊藤先生がお

りました。

こわつ

思わず目を見張った私に気がついたのか、こたるーちゃんが顔を動かさず視線のみで伊藤先生を見た。

「……」

ナイスどん引き。

こたるーちゃんは伊藤先生に掴まれていて腕を少し揺らして、申し訳なさそうに首を傾げる。

「そろそろ、離して頂いても？」

「あ、すみません」

恥ずかしそうに頬を赤らめて腕を離したけど、あなた一瞬目を細めましたよね？

エア舌打ちが見えたような気がしますよつ！

こたるーちゃんは掴まれた部分を軽く払うと、斜めに体を引いた。

「向こうで」

「……ハイ」

なんか、罪人にでもなった気分だ。

歩き出せば、なぜか伊藤先生もついてきて。

不思議そうなこたるーちゃんに、満面の笑みを彼女は向けた。

「私も司書ですから。変更箇所についてのお話し合いなら、把握させて頂きたいですわ」

について。

こたるーちゃんは「ええ、分かりました」と頷いたけれど、今見えないところで舌打ちしたよね？

しかも、エアじゃなくてリアルで！

ほら、伊藤先生が不機嫌そうに私を見てるじゃないか――！
やめてよー、ハツ当たりは私に来るんだからああ。

そして、このページの冒頭に戻るわけです。

こたるーちゃんは、穏やかで親切で優しいけれど。

血口中で思い込みが激しくて、何よりも今は建前のオブラーートに綺麗に包んでいるけれど好き嫌いのハツキリしている御仁でありますよ……

1.1 幼馴染と後輩と先生と（後書き）

やつぱり四苦八苦中です^ ^;
遅くなりました、すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4863y/>

幼馴染と図書室

2011年11月21日16時45分発行